

# 高等教育研究センター

Research Center for Higher Education

## Newsletter

No.032

目次

2016.12

- 平成27年度学内版GP成果
- 大学生の学習、各種活動と成績の関係について
- 高等教育研究センター年報
- スタッフからひとこと



信州大学 | 高等教育研究センター

### 平成27年度学内版GP成果報告 vol.4

前号に引き続き、平成27年度学内版GPに採択された取り組みをご紹介します。

また、平成29年度の学内版GPの応募〆切は平成29年1月20日までとなっております。ぜひ皆さまからの多様な取り組みの応募をよろしくお願いいたします。

#### 人文ホールから世界へ：信州松本に「世界」を集めるー

#### 《人文学的インターアクティブPBLプログラムの起ち上げ》

人文学部教授 伊藤 盡

#### 人文ホールが出发点

信州大学人文学部に設置されている人文ホールは、木目豊かな入口の床、窓際に長く伸びるカウンター式のテーブル、濃茶系の大小様々なテーブルを配し、学生の交流や独習の場として、また食事や談笑する場として日常的に活用されている。大教室とは異なる雰囲気を持つこのスペースを利用して多くの講演が開かれているのも、このホールの魅力の一つである。信州大学人文学部が平成27年度学内版GPを試みたのも、このホールが学生諸君にとって大いに利用され、愛着ある存在となっていることが前提としてあった。

#### 「人文学的」とはどういうことか

人文学部は、多くの人にとって誤解を受け易い存在である。近年新聞雑誌で取り上げられ大いに議論となった人文学不要論は記憶に新しいが、人文学は哲学や人道主義的な礼儀正しさを重んじるのがその基盤にあるためか、強い自己主張や自分の働きの成果を広くアピールすることを長い間行なわなかった伝統がある。黙々と研究・教育を行い、社会に出て行く学生が人文学の専門知識を活かしつつ、人間らしい感情や自尊心を持ち、人と人を結びつける家庭や社会を築き上げれば、誰に評価されなくともよい、そのような気概を持つのが本来人文学を修めた生き方である、と。しかし、そのような謙遜で利他的な価値観は、今日、人文学的研究・教育を軽んじる「声の大きな」一派によって付け入れられているためか、むしろ弱点や欠点かのように誤解される傾向にもある。しかし、本当にそうなのだろうか？

#### 人文学と「PBL」プログラムとの結びつき

「人文学的インターアクティブPBLプログラム」と銘打った試みは、人文学とは何かを学生自らが考え、一般的な誤解や表面的な理解ではなく、経験に基づく言説の重みや真実を直接学ぶ機会を与える枠組み構築を目指している。そもそも人文学とは、前述の価値観に基づきながら、歴史や哲

学、神学、言葉が伝える物語、人と人との繋がりとしての社会など、イメージ、思考、認識、価値観といった目に見えない、人間の脳みその中の中のみ存在する「モノ」を扱う学問である。そのような学問分野においてインターアクティブな学びを大学が提供するため、松本キャンパスにしながら、学生の脳みそに多くの経験をさせる。それがこのプログラムの意義である。

PBLは何か、二つの考え方が存在する。「課題克服型 (Project-Based Learning)」と「問題解決型 (Problem-based Learning)」である。厳密にはまだ定義も曖昧なこの教育メソッドだが、重要なことは、これがアクティブ・ラーニングであること、つまり、個々の学生の認知的、論理的、社会的能力を鍛える双方向的授業であるということだ。しかし、脳内の認知的・論理的・社会的能力を鍛える根本的なメソッドは、単なるスキル向上以外の領域では、まだまだ未熟なことは否めない。そこで敢えて「人文学的」な分野での方法にチャレンジしていったのである。

人文学部のある松本市は、交通の便も決して良いとは言えない場所にありながら芸術家や工芸家が集まり、クリエイティブな人々の交流の場として存在している。ならば、その地に「世界」を呼ぶのはむしろ積極的に推進すべきと考えた。しかしながら、人文学の分野で世界的に活躍する人々の言葉を直接聞いても、普段から問題意識や前提となる知識を活用していなければ意味がない。そこでPBLプログラムを取り入れることで、授業で問題提起をし、学生が図書館やインターネットを通じた独習をまとめることで問題意識を先鋭化させる。その上で、世界を知る人々を松本に招き、論題について聞くだけでなく、講演者に問を自ら発し、授業から一歩外に出る経験を重ねることで、人文学的な「実践」とは何かを把握することが目標であった。

#### 四つの実施プログラム

全部で4回の実施があった。北欧神話学者でアイスランド大学教授ウルヴァル・ブラガソン博士による講演「古北欧語神話詩『巫女の予言』とは何か」(4月10日)には30名が参加し、それまで本の世界でしかなかった「アイスランド学」の実例が展開されるのを学生は目の当たりにした。元人文学

部留学生で落語家シリル・コピーニ氏による独演会（11月13日）には50名が笑いを通じて日本とフランスの文化を考えた。京都大学人文科学研究所准教授村上衛博士の講演「海の近代中国とグローバルヒストリー」には31名が参加して、本学部准教授豊岡康史博士とのテーブル討論を含めて、現在の日中関係の背景を学ぶことができた。本学のトルコ音楽専門家濱崎友絵准教授の招聘に呼んで来松した、日本を代表するイスラーム学者同志社大学内藤正典教授の講演「今中東で何が起きているか？—シリア内戦・難民問題・「イスラーム国」・テロ」には人文ホールに入りきれない多数の参加があり、第四講義室にて開催され、出席者は150名に及び、地元の新聞にも講演会の模様が報じられた。

以上の実施は、ともすると単なる机上の空論と思われがちな「人文学的知見」が、実は世界と結びつき、活躍する場を提供することになっていることを学生に実感させる結果をもたらしている。しかし、このような人文学的教育は、必ずしも即効性のあるものではなく、学生ひとりひとりの内部に発酵させ、実を熟させる時間をかけてこそ、充実した知識や大きな実りになるものである。昨年度の実践を経験した学生たちの実りを今後も期待したい。

以上、人文学部の英語学、仏語・仏文学、芸術コミュニケーション・社会学・歴史学、東洋史の各分野で、《世界》で活動する専門家を招待し、授業との連携を行うことで、人文学教育に新たな方法を導入できたのは、GP支援に負うところが非常に大きかった。ここに学部を代表して謝意を表する次第である。



内藤正典教授講演ポスター



ウルヴァル・ブラガソン博士講演ポスター

## 一診療チームに一学生を配置し、ポートフォリオで評価する新しい臨床実習

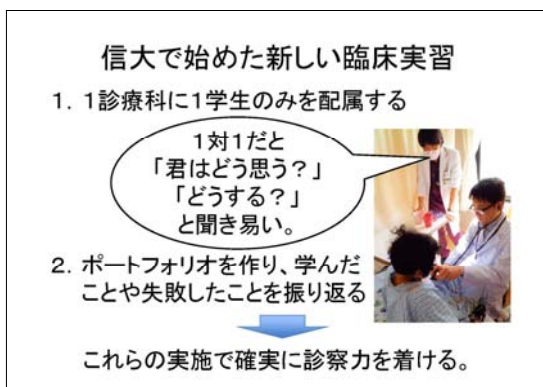
医学部医学教育センター 多田 剛

### 新卒の先生って、大丈夫？

体の具合が悪くて病院に行った時、担当の先生が新卒だったら、あなたはきっと「この先生で大丈夫かな？」と思うでしょう。これは我国の医療が抱える弱点の一つで、主因は我国では医学生が見学中心の臨床実習を行っているからです。これを正すには学生を診療チームの一員とし、学生時代から臨床推論ができるように訓練すれば良いのですが、今の指導医にはその目的は理解できても、自分にその経験がないために、どのようにすれば良いのかがわかりませんでした。

### 学生と医師が一对一で行う実習

そこで、私たちは学生をこれまでのようにグループではなく、一診療チームに一人だけ配属することにしました。こうすれば、指導医らは自ずと「この場合、君ならどう思う、どうしたらいいと思う？」と質問するでしょう。このために、県内外の多数の病院に協力を求めて、新しい臨床実習を始めました。実習先は学生に自由に選ばせました。幸いにもこの実習は学生にも指導医にも大いに支持され、この目標は達成できたと考えています。そこで、平成27年度よりはさらに期間を延長し、評価の方法も改良することにしました。



### 学生は評価しないと努力しない

さて、この実習では学生らはこれまでよりもはるかに多くの病院のはるかに多くの医師から指導を受けます。この際、指導医らがてんでバラバラに学生を指導し、評価したのでは、学生は混乱してしまいます。と云って、評価されないと彼らは努力しません。

### ポートフォリオで客観的な評価

そこで、学生がどこで実習しても同じ診療科なら同じ能力を獲得できるように診療科毎に共通の達成目標を作成し、指導者や評価者が異なっても彼らができるだけ客観的に評価されるようにポートフォリオとルーブリックを用いた形成的評価を実施することにしました。ルーブリックは公開し、学生はその基準に合わせて、実習中に疾患について学んだことを学習レポートとして、また患者や医療スタッフから学んだことを行動レポートとして提出します。

### 学生の実習内容が評価者に伝わる種々の工夫

各病院の診療チームで直接学生を指導した医師らの意見を尊重するために、彼らの評価票は封印することにしました。提出されたポートフォリオは大学の教員が事前に読み、実習最終日にはその教員が学生と4週間の振り返りをしています。また、特定の学生が行く先々で同じ失敗をしないように、一部の学生の振り返りは医学教育研修センターでも行っています。このポートフォリオによる評価を普及させるために学内外の病院で説明会を過去4年間で100回以上開催しました。

### ポートフォリオでわかる実習内容

このようにいろいろ工夫した結果、現在は学生のポートフォリオを読めば、学生が4週間の臨床実習をどのように過ごしたかが手に取るようにわかるようになり、臨床実習を評価する手段として十分使えるようになりました。



# 大学生の学習、各種活動と成績の関係について

## —「学習時間調査」(2015年度)の結果に基づいて—

今時の学生はサークル・部活動、アルバイトで忙しくて、なかなか勉強しないと嘆く先生はさぞ少なくないでしょう。度が過ぎるサークル・部活動やアルバイトは間違いなく大学生の本業である学習に支障が出ます。しかし、課外活動やアルバイトをしない学生は、本当に勉強しているのでしょうか。学業以外の活動を通して、人的ネットワークを構築することはむしろ大学、及び将来のキャリアへの満足度の向上に繋がります。このことは、本学の「卒業生調査」(2014年)を含め、すでに多くの研究に実証されました。それでは、学業と課外活動、アルバイトを両立させるためには、各活動をどのように配分すればよろしいのでしょうか。今回のニュースレターは、「学習時間調査」(2015年度)のデータを用い、授業、授業外の学習、サークル・部活動、さらにアルバイトなどの信大生の各種活動の時間が成績にどのような影響を与えたのかについて行った分析の結果をご紹介します。この分析を通して、効果的な指導方法を皆さんと一緒に考えてみます。

### 各種活動の時間と成績

今までの「学習時間調査」と比べ、2015年度の調査は、対象者を1~3年生に拡大したと同時に、学習時間以外にサークル活動やアルバイトなどの時間についても設問を設けました。各学部のご協力のおかげで、回収率が80% (回収数：5,186) に達しており、学生の学習と生活の状況をクリアに見ることができました。

表1 成績の規定要因

|             | 1年次 | 2年次 | 3年次 |
|-------------|-----|-----|-----|
| 履修科目数       | -   |     | -   |
| 授業と関連する自学自習 | +   | +   | +   |
| 自主的学習       |     |     |     |
| サークル・部活動    |     |     | -   |
| アルバイト       |     |     | -   |

表1は、各種活動の時間と成績の関係を示す結果です。ここでは、成績を従属変数にし、各種活動の時間を独立変数にして、学年ごとで重回帰分析を行いました。「-」の符号は、成績にネガティブな影響を意味しています。その項目の量が多ければ多いほど、成績に悪影響が出かねないと理解していただければよいです。逆に「+」の符号のつく項目は、成績の向上を促進する活動内容を表しています。

まず、1年次と3年次の時、履修科目数が多いことはよい成績を収めることに支障が出るのが分かります。高校と比べ、1年次の学習環境が大きく変えたゆえ、過剰な科目の履修は、適切な授業外学習時間の確保が困難になり、成績に悪影響を及ぼしたからでしょう。一方、3年次は、卒業論文、卒業研究の準備に加え、就職活動も開始したため、授業外の学習時間が確保できないことが原因だと推測できます。学生の学習時間を十分に確保するためには、適切な授業科目の履修指導が必要です。

次に、すべての学年で、授業と関連する自学自習の時間数が成績を強く規定している特徴が見られます。やはり良い成績を収めるには、地道な勉強が欠かせません。

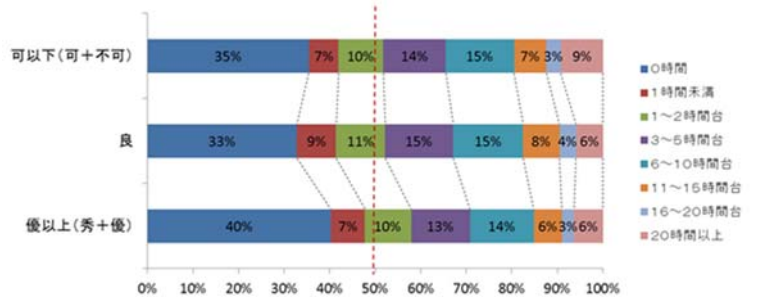
面白いのは、サークル・部活動、アルバイトの時間が1年次と2年次の時に、成績に有意な影響を示しておらず、3年次のみ成績に負の影響を与える結果です。1年次と2年次の間は豊富多彩な大学生生活を存分に体験することが大事ですが、ずっとそのような生活を続けるならば、中だるみになりかねないので、3年次になると勉強に切り替える必要があると解釈できます。

このように、大学生の本業である学習の質を維持しながら、大学生生活を多彩なものにするためには、①適切な授業科目の履修指導、②授業外学習時間の確保、③学習の中だる

みを防止するように、課外活動の適切な時間配分に対する指導が必要でしょう。

### 孤独な学生

「課外活動やアルバイトをしない学生は、本当に勉強しているのでしょうか」という冒頭の質問に戻りましょう。興味深い調査の結果があります。図1は、一週間あたりのサークル・部活動時間を成績別で示した結果です。成績不振の学生(可以下)はサークル・部活動の時間が若干長いものの、その他の成績グループ(秀, 優, 良)の学生との間には大差が見られません。注目すべきは、成績不振者の中で、サークル・部活動をしていない学生が35% (実数376名, 全調査対象者の7%) を占めていることです。同様に、成績が可以下の学生の中で、アルバイトをしていない学生が33% (実数351名) を占めています(図省略)。さらに成績が可以下でサークル活動もアルバイトもしていない学生は、実数では133名でした。ここでは、成績不振者の中で課外活動もアルバイトもしていない学生を「孤独な学生」と呼びます。



このような「孤独な学生」を早期に発見し、適切な指導を行う必要がありますが、問題はこのような学生はどこにいるのでしょうか。また、どのように支援を与えればよいのでしょうか。前者に関しては、GPAによる学習指導がそうした学生を発見する最適なチャンスだと考えられます。後者の学習支援の問題については、「孤独な学生」を含め、すべての学生を巻き込むアクティブ・ラーニングが有効でしょう。このような実践は本学ですで行われています。2012年度より開講した「大学生基礎カゼミ」は、グループワークなどのアクティブ・ラーニングの手法をフルに使い、友人、先輩、教職員と協力的な関係を結び、助け助けられながら、大学における種々の課題を乗り越えていく先駆的な試みを行っています。このように、「孤独な学生」を見つけ出すのと同時に、学生・教員すべてを巻き込むアクティブ・ラーニングを通して、「孤独な学生」を作り出さない環境の整備を併行して進めるのも効果的なのではないでしょうか。

(高等教育研究センター講師 李 敏)

## 平成28年度 高等教育研究センター年報

## 加藤 鉦三（高等教育研究センター 副センター長）

高等教育関係では、ミズーリ州立大学カンザスシティ校でのSupplemental Instruction（補完授業）の3日間の講習会に参加しました。科研費獲得に関するFDを2件、その他のFDを数件行いました。中期計画関係では、例年の通り、中期計画の円滑な遂行を目的に、全学部を年に2回訪問し懇談会を持ちました。

言語学関係では、科研費（研究題目「演繹的分析法と意識・逐語訳ダブル対訳コーパスによる助詞デの英訳のしかたの研究」、基盤研究（C））を獲得し、その研究成果を日本英文学会中部支部第68回大会で「英語らしさと日本語らしさに関する言語学的予備研究」というタイトルで発表しました。

## 矢部 正之（高等教育研究センター 教授）

高等教育に関わる研究開発の取組は、情報通信技術を利用した教育を中心に行っています。これに関して、「能動的学習を深めるためのICT活用の現状と課題」（2016PC Conference論文集, 99-100（2016））などを発表しました。また、この分野に関わる研究会（ケータイ活用教育研究会）を毎年松本で開催しており、本年は8月23日に次世代大学教育研究会と共催で開催しました。

さらに、本年度から新たな取組として、長野県若年層人材戦略研究会の設立に加わり（会長を拝命）、インターンシップの教育と地域活性化の両面からの研究に着手しています。本年は、5回の研究会を開催しました。

## 加藤 善子（高等教育研究センター 准教授）

学内では、「大学生基礎カゼミ」のコーディネーターと担当教員へのFDとサポート、そして全学を対象としたFDを中心に担当しています。今年は特に、アクティブ・ラーニングの推進、シラバスの書き方、授業デザインについてのFDを中心に提供しました。

研究では、科研費「初年次セミナー受講生の『ふりかえり』を基盤とした学習支援のあり方に関する研究」（基盤（C））を取得し、夏に加藤鉦三教授とともに、Supplemental Instruction（補完授業）の研修に出席しました。それらを含め、これまで行ってきたアメリカの学習支援プログラムに関する研究を、【加藤善子「アメリカ合衆国の学修支援」山内乾史・武寛子編『学修支援と高等教育の質保証（Ⅱ）』明石書房、2016年8月17日, pp.76-93】にまとめ、その後、【加藤善子「連載・学修支援の教育方法 アメリカ合衆国の学修支援」①②として、『文部科学教育通信』No.400およびNo.401】の2回の連載にまとめて発表することができました。

## 李 敏（高等教育研究センター 講師）

学内では、「学習時間調査」を中心に分析と報告書の執筆を行ったと同時に、博士後期課程改組のために、進学の一歩調査及び修了者採用の一歩調査の実施と分析に携わりました。

研究では、個人科研「日本留学の効果」の一環として、「中国人留学生の日本留学決定要因に関する研究—Push-and-Pullモデルに基づいて—」（『大学論集』第48集）を発表し、The 68th JSES Annual Meetingで“Sending Local Students Abroad and Accepting International Students in China”s Higher Education”をテーマに口頭発表をしました。その他、共同編著者として、叢書『中国における高等教育の変貌と動向—2005年以降の動きを中心に—』の執筆と編集を行いました。

## 古里 由香里（高等教育研究センター 助教）

高等教育研究センターへの10月の赴任後、学内関連業務としては、「2015年の学習時間調査」など学生調査データの分析や、基礎カゼミデータのデータベース整備および分析などIRとしての業務を行いました。研究活動としては、2015年社会階層と社会移動調査研究会での研究活動に参加し、「少子高齢化と自営業：女性自営業における労働と子育て・出産の両立可能性」、「少子高齢化と自営業：高齢自営業主における貧困・格差の検討」などをテーマに研究発表を行っています。また、今年度は電気通信財団研究調査助成社会科学系の研究助成を獲得し、主にウェブ調査を主体にしたSNSの研究をしました。

## スタッフからひとこと



10月から高等教育研究センターで、主にIRの担当として勤めはじめました、助教の古里です。2011年に学部を卒業して、はや5年。こうして、信州大学に戻って来られたこと、ご指導いただいた先生方と一緒に働けることを、非常に嬉しく思っております。事務の方々にも卒業生の方が多く、心強い限りです。せっかくだいた機会を生かして、今度は教員として信州大学に少しでも貢献できるよう、何ができるのか模索する日々です。みなさまどうぞよろしくお願いいたします。（高等教育研究センター助教 古里 由香里）

